優先席では慎重に。

紫李鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

皆さんご存じですよね？優先席ではケータイの電源を切らなくてはいけないことを。

目次

優先席では慎重に。 ―――― 1

優先席では慎重に。

私たちが毎日、当然のように使っているケータイ。皆さんご存じですよね？優先席では電源を切らなくてはいけないことを。

午後の京葉線。杖を手にした一人の老婆が乗車した。優先席には、ケータイを操作しているヘビメタ風の男が陣取っていた。

老婆は、ヘビメタ風の向かいに座った。途端、

「う～」

老婆は胸を押さえると、ヨロヨロとヘビメタ風の傍に歩み寄って倒れた。

「げ。な、なんだよ！」

ヘビメタ風は咄嗟（とっさ）に腰を上げた。

ザワザワッ……

乗客がざわめいた。

「大丈夫ですかッ！」
　ストパーの若い女が老婆の傍にやって来た。
「う～、う～……」
　老婆は苦しそうに唸(うな)っていた。
　声をかけたストパーは、老婆の体に手をやると、シートに寝かせようとした。それを見ていた他の乗客が手伝いに駆けつけた。
「おばあちゃん、大丈夫ですか？」
　大学生風の男が声をかけながら、老婆をシートに寝かさせた。老婆は苦しそうに顔をしかめていた。
「ちょっと、おばあちゃんに謝りなさいよッ！優先席ではケータイを使っちゃダメって、知ってるでしょ？アナウンスでも言ってるじゃない、優先席ではケータイの電源を切るようにって」
　ストパーに咎(とが)められたヘビメタ風は、驚いた様子で頷(うなず)いた。
「ほらッ、謝りなさいよッ！」
　ヘビメタ風は老婆の傍に行くと、
「……どうも、すいません……でした」
　ボソボソと呟いた。

「う～……」

老婆は尚も苦しそうな顔で胸を押さえていた。

「おばあちゃんに何かあったら、あんたのせいだからね。万が一のために、ケータイと名前、住所と勤務先を教えなさいよッ！」

女の迫力に負けたヘビメタ風は、渋々ケータイ番号を教えていた。

当日の夕方、ストパーはヘビメタ風に電話をした。

「――おばあちゃんが入院したわ」

「エッ！……」

「入院費や慰謝料の請求をおばあちゃんに頼まれたの。ちゃんと払ってくれるわよね？警察に届ける？それとも示談にする？どっちよ？」

ストパーは決断を急がせた。

「じ、示談で……」

ヘビメタ風は慌てて答えた。

午後の中央線。杖を手にした、一人の老婆が乗り込んだ。優先席に座ると、向かいの席にはケータイに夢中になっているサラリーマン風の中年男がいた。途端、

「うッ」
胸を押さえた老婆がヨロヨロと、向かいのサラリーマン風に歩み寄って倒れた。
「ヒェッ」
びっくりしたサラリーマン風は、咄嗟に立ち上がった。
「だ、大丈夫ですか？」
跪(ひざまず)いてシートに凭(もた)れている老婆に、セミロングの若い女が声をかけた。
「う～、う～……」
老婆は苦しそうに胸に手を当てていた。
ザワザワッ……
他の客がざわめいた。セミロングは、シートに寝かせようと、老婆の体を持った。
「ちょっと、突っ立ってないで手伝ったらッ？」
セミロングはケータイを手にしているサラリーマン風を睨(にら)んだ。
「あっ、は、はいッ」
サラリーマン風は慌てて老婆をシートに寝かせた。
「おばあちゃん、大丈夫？」
セミロングが声をかけた。
「う……う……」

老婆は尚も苦しそうにしていた。
「ちょっと、おばあちゃんに謝りなさいよ。あんた、社会人でしょ？優先席でケータイが使えないのは常識でしょ？おばあちゃんに万が一のことがあったら、あんたのせいだからね。ちゃんと連絡先教えなさいよ」
「……は」
セミロングの迫力に圧倒されたサラリーマン風は、渋々と名刺を出した。

当日の夕方、セミロングはサラリーマン風に電話をした。
「――おばあちゃんが入院したわ」
「エッ！」
「入院費とか慰謝料をおばあちゃんに頼まれたの。ちゃんと払ってくれるわよね？警察に行く？それとも示談にする？」
「示談で」
サラリーマン風は即答した。

駅のトイレ。

「アハハハ……」
セミロングと老婆が高笑いをしていた。
「チョロいもんよ」
セミロングのカツラを脱いだ方が言った。
「ってか、さっきのサラリーマン、俺のオッパイ触ってやんの。おもちゃの垂れパイ付けててよかったぜ」
白髪のカツラを脱いだ方が言った。
「クッ。今月の儲(もう)け、スゴいぜ。成功率１００パーじゃん。やめられない、止まらないって奴。よう、今度は何線にする?」
セミロングのカツラを脱いだ、茶髪のショートが聞いた。
「てか、老婆役、代わってくんねぇ。腰曲げんのマジ疲れんだけど」
白髪のカツラを脱いだ、黒髪のショートが不平をこぼした。
「いいよ。じゃあさ、こうしよう。来月は俺が老婆で、お前が助け役と交渉役」
化粧を落としながら、茶髪が提案した。
「……か。交渉はお前の方がうまいもんな。やっぱ、老婆役でいいかぁ」
ブラウンのアイブローで描いていたシワを拭き取りながら、黒髪が諦(あきら)めた。
「だろ?はい、これ。さっきのサラリーマンが会社に内緒にしてくれって、くれた金を折

半した分」
　茶髪が金を渡した。
「サンキュー。今度さ、脚本変えてみねぇ？」
「例えば？」
「例えば、……親子同士とか、老婆同士とか」
「いいよ、別に。けど、老婆同士だと、シワ描くのめんどいし、これまでどおり、若い女役でいいよ」
「自分ばっか楽してからに」
「それより、明日は登校しようぜ」
「オッケー！じゃあな」
「バイバイ！」

　着替えを終えた高校生の男子二人は、各々の自宅に帰って行った。

　おしまい。ジャンジャン！